Osaka University Knowledge Archive

Title	関節症の有病率に関する調査研究 : 特にX線的股関節症を中心に
Author(s)	大田, 寛
Citation	大阪大学, 1978, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/31948
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【21】

氏名・(本籍)	大田　寛（おおた　ひろし）
学位の種類	医学博士
学位記番号	第　4149　号
学位授与の日付	昭和53年2月22日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**関節症の有病率に関する調査研究** **——特にX線的股関節症を中心に——**
論文審査委員	(主査) 教授 小野　啓郎 (副査) 教授 重松　康　教授 朝倉新太郎

論文内容の要旨

〔目　的〕

関節症は関節軟骨の変性を初期病変とし，同時に反応性増殖性変化が生ずる慢性の変性関節疾患で，壮年期以後その発症は漸増する。疼痛が主徴であり，症状は一般に軽度のものが多いが，膝，股などの荷重大関節の重症例や脊椎症による脊髄症状を呈したものは，社会生活は勿論，日常の家内動作においても高度の支障をきたし，ねたきり患者におちいるものもあり。リウマチ病のなかで最も頻度の高い疾患であるにもかかわらず，本邦での関節症の疫学調査報告は非常に少ない。最近のわが国における寿命の延長化と共に，高令者の人口構成に占める割合も増加し関節症に関する疫学調査を含めた実態調査が要求されている現今本調査の意義は大きいと思われる。従来の関節症の疫学的調査は部分的な報告が大部分で，今回の一般住民を対象とする直接X線撮影に基ずく系統的な調査成績は，今後この面での基礎的資料として，また関節症の原因，治療，予防法を考える上でも有用なものと考える。本論文の目的はX線的関節症，特に股関節症の有病率を明らかにし，従来日本人を含めた東洋人では股関節症が欧米人に較べ少ないという通説の是非を明確にすることである。

〔調査方法および成績〕

調査対象地区は和歌山県西牟婁郡上富田町岡，岩田地区で，気候の温暖多湿な農村田園地区である。全人口は3,064名（1973年）で，30才以上の住民（1,330名）を対象とし，呼び出し直接検診を実施した。検診率は69.1%である。X線撮影は頸椎側面，手および指関節正面，股関節正面に行った。検診期間は1973年8月と1974年5月の2回にわたる。さらに1974年11月同地区の戸別訪問調査によって直接検診への不参加者の実態についても調査した（調査率は97%）。

X線的関節症の重症度判定はKellgren & Lawrenceによる関節症の疫学的調査用レ線診断基準によった。X線判読は同一フィルムを2人の経験の深い整形外科医が別々に判定し，判定差のあるものは判定者間で協議の上決定した。

〔成　　績〕

1）X線的股関節症の性，年令別頻度

X線的重症度grade 2 以上のものは男女とも加令とともに，その頻度は増加し，30才以上の全年令層では男3.0%，女6.8%と有意の差で女に高頻度であった。読影し得た股関節フィルムは男398名，女339名計737枚である。grade 3のものは男0名，女3名，grade 4のものは男1名，女3名でgrade 3ないし4と判定したもの男1名（0.3%）女6名（1.8%）計7名で，30才以上でのX線的股関節症の有病率は0.94%となる。この7名のうち一次性股関節症は2名（0.3），二次性のそれは5名（0.7%）であった。

2）臼蓋形成不全（CE角20°未満）の頻度は男3.4%，女1.2%で，男女間で差はなく，加令とは関係のない頻度であった。　3）英国のLeigh地区の一般住民55才から64才の年令層における股関節症の頻度と比較するとLeigh地区では男8.4%，女3.1%，上富田地区では各々0.3%，1.8%と男女とも本調査地区は低い頻度であったが，女では有意差はなかった。　4）香港地区の中国人の病院受診者を調査した55才以上の年令層との比較では，香港地区では男1.2%，女0.8%，上富田地区では各々0.6%，2.3%と有意差はなかった。臼蓋形成不全は本調査地区の方が男女とも高頻度であった。　5）頸椎，手関節，指関節（DIP, PIP, MP, 1 CM）のX線的関節症の性，年令別頻度も調査し，Leigh地区の成績と比較した。男女とも本調査地区で低い頻度であった部位は第1手根中手関節病（1 CM)で，臨床的にわが国でこの部の関節症が少ない事実をよく示していた。　6）遠位指節関節（DIP）症のX線変化の重症度が増すほど，臨床的診断によるブシャール結節，膝ないし肘関節症およびX線的診断による頸椎症，手関節の頻度は比例して増加していたが，股関節症とは関連がなかった。

〔総　　括〕

一般住民を対象としたX線的股関節症の疫学調査はわが国ではじめての報告である。30才以上の線的股関節症の有病率は0.94%で一次性のものは0.3%，二次性の股関節症は0.7%であることが判明した。これらの成績は香港在住の中国人の調査成績と有意の差はみられなかったが，Caucasianにくらべ低い有病率であることが確認された。その理由として，わが国と欧米人との生活様式の相違が関与しているものと推定される。無症候性の一次性股関節症も二次性のそれに比し決して少なくない頻度（0.3%）であった。頸椎，手関節，指関節のX線のX線的関節症についても性，年令別頻度を明らかにしCaucasianとの比較をも行い得た。

論文の審査結果の要旨

住民検診によってレ線的股関節症の有病率を求めた。その結果，30才以上では0.9%にのぼり一次

性のものは0.3%をかぞえた。この頻度はCaucasianに較べ低いのであるが，一次性のそれについては従来の定説をくつがえす結果となった。なお，頸椎，手，指関節の関節症についても性，年令別頻度を明らかにし関節症の素因の面からも検討した。

この研究は本邦において最初のものであり国際的な比較を可能とした点意義が大きい。